

NPO 法人 ふろんていあタウン工房

ふろタン通信

2023年8月1日

広報センター

No. 49



7月6日に発信したふろタン通信 48 号の締め言葉には次のように書かれています。
2014 年 6 月 16 日誕生のふろタン工房は、来年 6 月には設立 10 周年を迎えます。
この機会に少しでも若返り(?)を目指して元気に歩んでいきましょう!

◆7月25日に行った二つの行事

今までにないような酷暑の日で、出来るだけ外出は控えるようにとの呼びかけが続く中で、それに逆らうような(?)二つのふろタン活動が行われました。

どちらも東陽町の UR リンケージ会議室での活動、一つ目は久しぶりに宮本保宏氏が参加した午後 1 時からの令和 5 年度ふろタン工房理事会、西原氏が急に欠席になり宮本・三田村・室井三人での意見交換会になりました。

二つ目が午後 3 時からの第 45 回二都研、ふろタン通信が最初に二都研の活動を取り上げたのは通信 34 号で 2012 年 3 月のミャンマーの建設省視察団の来日がきっかけになって誕生した「二都物語研究会」通称「二都研」です。

事務局：開発構想研究所・入江三宅事務所・UR リンケージ・URJICA チームの 4 社持ち回りで座長を置かずに進めてきています。

第 45 回二都研のスピーカーは相田諭希典氏でテーマ「ミャンマー訪問記」、三田村・相田・室井・浜 4 氏が東陽町の北の酒場通りに移動してからは、次回二都研スピーカーの URJICA チームの長野氏も加わって、お酒が入ると段々と楽しくなる懇親会になりました。

通信 43 号でも「ふろタン技研レポートコーナー活用術」を呼びかけてくれた長野氏の登場を楽しみに待ちましょう。



◆第3回ふろタンインタビュー 天空の山と「祈りの造形」

「日本橋高島屋の美術画廊で開かれていた「石空間展」、独創的な石彫刻家として内外実績を持つ大成浩さん(H)が、若い石の造形家を率いて始めてから 25 周年を迎えた記念会場で、奥様の栄子さん(E)とご一緒に、今までのこと、これからのこと、色々なお話を伺いました。お盆の迎え火の日のインタビューです(M)」と書かれた 2015 年 8 月 13 日付のインタビュー報告です。昔話を少し辿ってみましょう。

彫刻のある街かど実験と宇津木台の竣工記念碑

M 今開催されている石空間展が今年で 25 周年記念ですが、大成さんに初めてお会いしてからは 40 周年近くになるでしょうか。多摩ニュータウンの最初の入居が 1971 年 3 月、陸の孤島の不便な団地と言われたスタートでしたが、1974 年に鉄道が開通して永山駅前に日本住宅公団の事務所も移転し、ニュータウンらしいまちづくりへと色々なことにチャレンジしていた時代でした。その頃、八王子を彫刻もあるまちにしようと街づくり運動に取り組んでいた造形大の先生方(大成浩・渡辺隆根・魚住双全)にお願いし、永山の近隣センターに彫刻を置く「まちかど実験」を行うことにしました。多摩局のあと私は新宿の首都圏本部に異動になり、宇津木台地区も担当し、1988 年に竣工記念碑をつくる話があり、尾根道空間を宇津木台緑地として残っていた地区でしたから、ふさわしい記念碑をと思い大成さんに声をかけました。

H そうでしたね。ですからあの「風の塔」は室井さんとの合作ですよ。あの頃から不思議な縁でつながってますね(笑)

M その後宇津木台の宅地分譲地に大成邸が建って、今もずっとそこにお住まいですね

E この記念碑が私たちを呼んでくれたのかしらなどと話していました。それまでは分譲地に申し込んでも落選していたのに、この時は百何十倍かの宅地に当たって幸運の風を運ぶ塔です。周りに施設が立ち始めて記念碑が移設されましたが、銘板は今も一緒に置かれています。



「祈りの造形」西村公朝の時空を歩く

M 宇津木台以降も、国展と石空間展の案内状をいつも送っていただき、会場でお会いできたときは言葉を交わすようなおつきあいでしたが、運よく奥様とご一緒の時は彫刻の前で写真を撮りてあとで送ってくれて…奥様は専らカメラマン役。今年 4 月に吹田市立博物館での西村公朝生誕 100 年展と本「祈りの造形 評伝・西村公朝の時空を歩く」(新潮社)の出版のご案内をいただいて、日本の仏像修理・制作第一人者のご長女だったと初めて知ることになりました。

E 行軍中一度も敵兵に合わず弾を一発も撃たずにすんだこと、不思議なくらい怖いことが自分を避けていき、終戦間もない 11 月に復員・帰国できた幸運は、夢の中での仏さんとの約束のおかげ、戦場ですから、非常に悲惨な現場に幾度となく遭遇している記述もありますので、仏像の修理や制作を通して「祈りの造形」を生涯追及していたのでしょう。

M 大成さんも終戦の翌 21 年 11 月に大陸から帰国されたとお聞きしましたが。

H 私の父は昭和 20 年 5 月に現地召集で出兵し、8 月 17 日にソ満国境で戦死しました。私は終戦の年は 6 歳で、母と弟妹と一緒に満州から難民となって朝鮮半島の三十八度線を越えて帰国しました。引揚者達の一同と共に野宿した草原で感じた風の記憶が、今の「風」シリーズにつながっています。

◆ 大成浩さんは、6月25日お亡くなりになりました(83歳)。
心よりご冥福をお祈りいたします。